

明治の歯磨き粉とライオン像

わが国では、神社で参拝するとき、手を洗い禊（みそぎ）として口をすすぐ習慣があり、これが朝起きて歯を磨くことにつながりました。古来より塩を使い、指や布などで磨いていましたが、江戸時代には塩の他に牡蠣の殻、珊瑚の粉末が使われるようになり、房楊枝（ふさようじ）や歯磨き粉が商品化され庶民にも一気に普及しました。江戸っ子にとって歯磨きと朝風呂は粋な証拠であり、互いに白い歯を自慢していました。

江戸中期の元禄時代からは房州（千葉）のきめ細やかな房州砂（ぼうしゅうずな）を主成分にした歯磨き粉が販売され、さらに口臭予防として麝香（ジャコウ）、丁子（チョウジ）や薄荷（ハッカ）などを香料として入れたものが普及しました。

明治期に入ると房州砂の他にも炭酸カルシウムや炭酸マグネシウムなどの研磨剤に加え薬効、清涼感のある香料が使用され、さらに洋式歯磨きの影響で殺菌消毒剤や発泡剤として石鹼が入るようになりました。明治23年（1890）福原商店（現資生堂）が本邦初の“練り歯磨”を発売、明治29年（1896）には小林富次郎商店（現ライオン株式会社）が“獅子印ライオン歯磨”を販売します。当時、商品には動物の名前を付けることが流行し、百獣の王でもあり、強くて白い歯牙が由来といわれます。

“獅子印ライオン歯磨”は品質が良く価格が安い（販売価格3銭 現在のおよそ750円に相当）ことから当時大ヒットし、販売から数年にして歯磨きのトップブランドとなり、そのパッケージの箱に描かれたライオンの絵は全国の人を知ることとなりました。

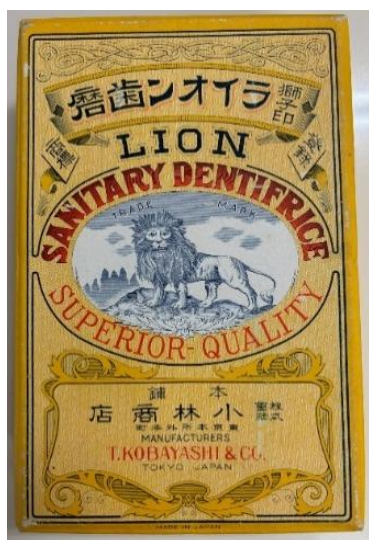
さて桐生が岡公園には現在、桐生市の平和と産業復興を祈念する市民のシンボルとして“織姫平和像”が建っています。先代は明治45年（1912）に日露戦争の戦没者記念碑として“ライオン像（獅子奮迅の像）”が建立され、太平洋戦争終戦直前、物資不足により金属供出される昭和18年（1943）までの約30年間、公園のシンボルとして同じ台座に存在しました。当時の絵葉書から確認できますが、この銅像は“獅子印ライオン歯磨”のパッケージに描かれたライオンのデザインと構図が非常によく似ていることがわかります。

「桐生史苑 第六十二号」には桐生が岡公園のライオン像の生い立ちについて、桐生出身の陸軍将校 森邦武（1868～1924）の発案により当時、桐生と東京美術学校（現東京芸術大学美術学部）両者に深く縁のあった人々のチームにより銅像が計画され、同校により銅像のデザイン、製作がされたこと、さらにほぼ同時期に小林富次郎商店が東京美術学校にライオン歯磨商標製作を依頼していたことが記されています。このことからパッケージに描かれたライオンと桐生が岡公園のライオン像のデザインの担当者は東京美術学校の同じ作者か、またはそれに近い人物と推察できます。

今も昔も人々の憩いの場の桐生が岡公園。かつて桐生人はライオン像を見上げ、歯磨き粉を思い浮かべる人もきつといたことでしょう。

（参考）青木 修 “台座はじつと百十年” 「桐生史苑 第六十二号桐生文化史談会」（2023年3月）

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】



大ヒットした“獅子印ライオン歯磨”



日露戦争記念彰忠碑「獅子奮迅の像」
（当時の絵葉書）